

両生類・爬虫類 調査法

両生類・爬虫類はみなさんご存知の通り、冬は冬眠してしまいます。従って調査は、両生類・爬虫類が活動する春、夏、秋に行うのが一般的です。時には越冬している個体を探すこともありますが、特に両生類の調査では、春から夏にかけて、繁殖のため水場が集まってくるので、春の調査は欠かせません。通常確認が困難なサンショウウオ類も卵嚢や幼生、産卵時期と重なれば成体の確認も可能です。しかしながら、両生類の繁殖期はそれぞれの種や、その地域の気候などで差があるため、調査適期を見極める能力が要求されます(このへんは調査者の経験がものを言うところであります)。秋の調査で、両生類の繁殖場所になりそうなよい水場を見つけ、春に再び現

場へ行ってみると、水が干上がっていたり、ブルドーザーが走り回っていた、なんてこともありました

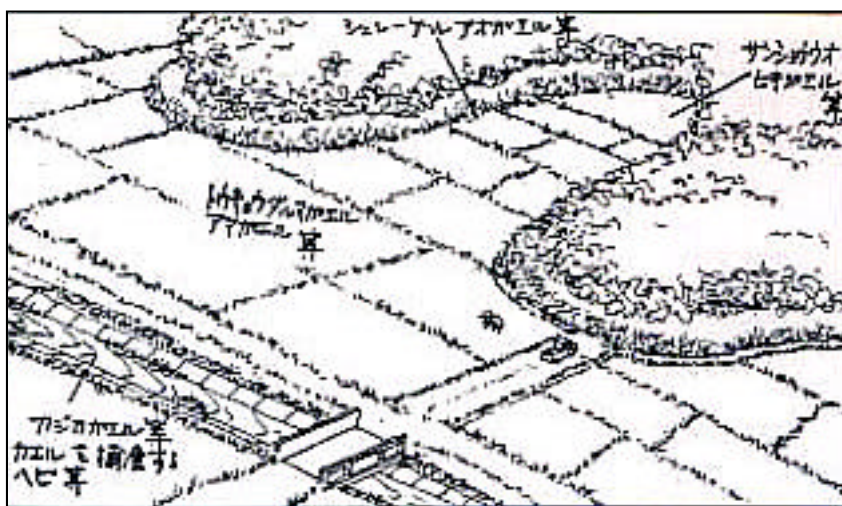
で、調査時期を設定した後に調査に入るわけですが、現場では、調査範囲内の両生類・爬虫類がいそうな場所(繁殖場所、餌場、隠れ場所等)を踏査し、生体や死体、脱皮殻(爬虫類)卵(両生類の卵塊、卵嚢)等の目視確認や、カエル類の鳴き声の聞き取りにより調査を行います。

簡単に書きましたが、両生類・爬虫類の調査では、「調査時期」と「調査場所(現場でどこを踏査するか)」の二つをしっかりと押さえておくことが重要です。これらを踏まえたうえで、以下に両生類・爬虫類それぞれの調査のポイントを記します。

両生類

前述しましたが、両生類の調査時期で最も重要なのは繁殖期となる春から夏です。両生類は繁殖期になると水場(主に水田や水たまり等の止水環境)に集まるため確認が容易で、この時期の調査だけでその地域の種相をほぼ把握することができます。ここでは特に多くの種が繁殖期を迎える春について述べます。しかしながら「春」の調査時期の設定は難しく、その地域の種相や気候等を考慮に入れ、調査適期を見極める能力が要求されます。種によって繁殖期が早春であるものや、晩春であるものなどがあり、春だけでも2~3回調査に入ることもあります。

で、実際に現場へ行ってみるわけですが、とりあえず地形図を拡げて水田や谷筋等の水がありそうな場所へ足を運びます。水場があったらその周辺をくまなく踏査し、成体や幼生、卵塊、卵嚢等の確認に努めます。卵の確認の際、比較的人の目に付きやすい場所に卵塊を産んでくれる種はいいのですが、トウキョ



図【両生類等の調査ポイントの例】

ウサンショウウオなどは、岸の水際部分がえぐれた場所や、底に堆積した落ち葉の裏側等に卵嚢を産み付けることもあるため、このような場所があったら実際に手を突っ込んだりして卵嚢を探します。

この他、死体や鳴き声(カエル類)も確認の対象になります。鳴き声を確認するために、必要に応じて夜間調査を

行うこともあります。

爬虫類

爬虫類調査の場合、特に時期にこだわるといことはありません。天気が良く、暖かい日であれば、大抵開けた場所に出て日光浴をしているので、確認は比較的容易です(ちなみに雨の日

表【カエル類の産卵時期と産卵場の例】

種名	1 2 3 4 5 6 7 8 9月	産卵場
アズマヒキガエル	■	池・沼・水たまり
アマガエル	■	水田等の浅い止水
ニホンアカガエル	■	日当たりのよい止水、水田・湿原・池
トウキョウダルマガエル	■	水田や水の中などの止水中・流れの緩やかな小河川

は物陰に隠れてしまうため、確認は困難です。しかしながらヘビ類などは遭遇率が低いので、これを補うために、ひたすら歩かなくてはなりません。この際、ただ闇雲に歩くのではなく、餌場や隠れ場所になりそうなところを重点的に歩きます。餌場としては両生類が集

まる水場があげられます。水田の畔の上などは見落とせない場所です。また、隠れ場所としては、岩の隙間や、倒木の下の隙間等があり、確認例が少ないときなどは、これらをつずつひっくり返しなが歩くこともあります。
小難しいことを書かせていただきま

したが、要は、どんな生物調査でも調査対象となる生き物の生態をよく理解して、いそうな場所を調査すればちゃんと結果は出せる、ということですね。
(本社自然環境調査室・佐々木孝太郎)

りょうせい・はちゅうるい ちょうさ ものがたり 両生・爬虫類調査物語

ケロケロケロッピが好き…の巻



(原案 当社O.B.・北川徹/イラスト 飯塚要)